

## 濁川孝志著 『星野道夫 永遠の祈り』

— 共生の未来を目指して』 でのぼう出版 (2019)

巻口勇一郎 常葉大学短期大学部\*

Nigorikawa Takashi, Michio Hoshino: *Eternal Prayer*  
*Aiming for a Future in Symbiosis*

MAKIGUCHI Yuichiro



探検家であり作家、写真家である星野道夫は言う。

「我々人類が自然の営みに対するおそれ  
を失ったとき滅びてゆくんだと思います。  
今僕たちは、その最後の期末試験を受けて  
いるような気がします。」(映画地球交響曲  
第三番「星野道夫」本書p.27)

星野道夫と同じく自らも自然をこよなく愛し、自然の中に身を置く著者は語る。現在、人類は70億人に膨れ上がり、その文明生活の陰で1日300種、年間10万種の生物が絶滅している。これは自然淘汰の1万倍のスピードである。

「人類は特別、といくら力説しても、生物学的に見れば人間も地球の生態系を構成する一つの種に間違いありません。このまま多くの人間が調和を度外視し経済優先の価値観のなかで生きてゆけば、絶望的な生態系破壊の連鎖は、やがては人類も飲み込むことになるでしょう。」(本書pp.75-6)

「スピリチュアリティとは、自然とは

多様な一つの命の共存の仕組みであって、宗教対立を生むような排他的なものでも商業的なものでもなく、山や川や風にまである種の神性を感じずようなセンスで、世界中の多くの先住民族がもっていたような自然と調和して生きる価値観だと思います。」(本書pp.84-5)

「人はその土地に生きる他者の生命を奪い、その血を自分の中に取り入れることで、より深く大地と連なることができる。そしてその行為をやめたとき、人の心はその自然から本質的に離れてゆくのかもしれない。」『星野道夫著作集3』(本書p.105)

何も食べないで飢えてしまうのがいいというのではなく、命を奪ってそれを食べて生きるという自然から与えられた自分の存在について思いを巡らせ、その連鎖のプロセスにある無言の悲しみに耳を澄ますこと。

こうした星野の思想は古事記などの神話のなかにもみられる。神話は、史実よりも物事の本質を射止めていると著者は指摘する。余分な指摘であるが、仏教にもアニミズム類似の思想はみられると思う。仏教では人間の命だけが尊いわけではなく、動植物も悟りへ向かい輪廻を繰り返す同じ命であると考え。自分で家畜を屠

\* yuichiro@tokoha-jc.ac.jp  
常葉大学短期大学部  
〒422-8581 静岡市駿河区弥生町 6-1 常葉大学 D401

らなくても、またベジタリアンであっても殺生は免れない。殺生をしながら生き、そのなかで仏道を成せんとすることが問われている。これは星野のいう「動物愛護よりも、自然のシステムに組み込まれ無言の悲しみに耳を澄まし、大地と連なること」に近いのかもしれない。星野は、宗教の教条を学ぶという枠組みにとわられず、広く自然体験のなかで自らの感性をはぐくむことのすばらしさと可能性を見せてくれている。

本書では、映画作品を含めた星野道夫の多くの作品がとりあげられている。著者によって見事にとりあげられた星野の言葉はどれも哲学的な箴言である。ソクラテスは無知の知、汝自身を知れ、金と地位のことに汲々として魂のことを気遣わず恥ずかしくないのか、と論理で相手に投げかけた。人間の隠されたアイデアや魂に周囲の人々の目を向けようとしたソクラテスやプラトンだが、その哲学を知ろうとすると論理を優先し数学的に頭で考えさせられる。思考がフル回転する。星野道夫の語りは確かに論理的だが、それでいてそれを感じさせず心に深く染み入って響く。星野のことばは、星野の創作に関わるというよりも、星野と深く一体となった自然が密度をつけて言葉として生誕し、結晶化したものと思えてくる。大自然が、星野道夫を通して、言葉という体を得て生誕した。その言葉を読むことで、読者のなかの自然が目覚めていく。すらすらと読み進めていくにつれて、語り手も読者も同じ大自然（の一員）という感覚になった。

原子力発電所が温暖化解決のカギとは必ずしも言えないこと、またアラスカでの国家政策による核実験計画が存在したところ、その危険性と計画への強い反対意見を展開し、アラスカの

自然を守った後に、アラスカ大学を突然に解雇されるなどしたホイッスルブローアー的な研究者、ビル・ブルーイットの話なども本書のなかで知ることができる。評者は厳しくも優しくもある大自然の神であるルドラやシヴァ、そしてそれと結びつけられるクンダリーニーの目覚めに関する研究を続けているが、後の世代のために自然を守ろうと生活や命を懸けた先人がここにも確かにいたことに感銘を受け、勇気を与えられた。

人の欲深さと良心との極があり、そしてそこを否定するのではなく許していくことで生きとし生けるものの多様性と共生、霊性という資質の自覚が促されるという自己超越性（トランスパーソナル）のプロセスが語られていたと評者には思えた。全体を通し、著者が星野道夫に深い感銘を受けたこと、星野道夫と著者の自然に対する愛が伝わってくる。広く一般の方が星野道夫の作品理解をすすめるために、私生活だけで手いっぱい現代人が（だからこそ人は生きてゆける）、なかなか普段は省みることのない自然の本質に触れるために、ぜひとも一読をおすすめする。昨日と変わらぬ便利な私生活を続けようと必死に、そして精一杯になっているのが今日の一般的な人であるけれど、現代文明から離れた大自然のなかで、これほどまでに豊かな思いがはぐくまれることを星野の著作の存在はまさに実証している。本書は豊かさとは何か、生きるとは何か、霊性とは何か、自然の声に耳を澄ますとは、近年の天災は人類に対して何を伝えようとしているのか、改めて多くを問い直す機会を与えてくれた。そしてアラスカに行ってみたくなった。